

本年より独立行政法人北方領土問題対策協会の和歌山県推進委員そして、北方領土返還要求運動和歌山県民会議の専務理事を務めさせていただき立場として、和歌山県より一人で、今回初めて北方領土を訪問させていただきました。訪問先は、日本が長年に亘り領土問題として関わる土地であり、訪問前の私の心は、北方領土に住んでいるロシア人はどのような気持ちで生活しているのか、どんな国民性の人たちなのか等々、責任感と期待感、不安感が混ざり合うとても複雑な気持ちでした。

出発前日の事前研修会で、大野団長の「日本側から北方領土問題に関し発信してはいけない。質問されたら、日本の領土だと言って良い」という言葉に、更なる緊張感を持ちました。日本人が国有の領土でありながらも、気軽には行けないとてもシビアな場所。領土問題に関するロシア人の考えを聞きたくても自ら発信してはいけない。出発を目前に、今までの人生の中で経験した事のない気持ちになりました。北方領土へビザなし訪問する日本人の心得として、親睦ではなく相互理解の増進であるという言葉の難しさや重みを更に感じました。



いよいよ出発です。私たち64名が『えとぴりか』に乗船する時が来ました。事前説明会で、ロシア人が一緒に乗船するとの説明があった時は、驚きました。私たち日本人が、北方領土へ訪問できる手段が、『えとぴりか』のみだと知っていたので、一緒に乗船するロシア人にとっても興味をもちました。『えとぴりか』に先に乗船しているロシア人19名がデッキで立っているのが見え、私もデッキに行き、言葉が通じなくてもロシア人と何か良いコミュニケーションを取れる方法はないかと考え、接近してみると、ロシア人同士が日本語で会話をしているのが聞こえました。「日本語が上手ですね」と話しかけると、北海道で1ヶ月ホテル暮らしをしながら日本語を学び、帰るところだと教えてくれました。このような友好が行われていることも知らず、無知な私は驚きました。年配のロシア人の女性は、北海道へ日本語を学びに来られたのは7回目だそうです。詳しい状況はあまり分かりませんが、もし、私がロシア人で、このように1ヶ月単位で数回、他国の言葉を学べる機会があるならば、頻繁に活用したいと羨ましく思うほどでした。

根室を出港して4時間。台風の影響で海は荒れていましたが、目の前に国後島が見える場所で、『えとぴりか』から『はしけ』に乗り換え、国後島に向かいました。『はしけ』に乗船してから、間近に海が見えたのですが、異常なほどの『かもめ』の大群にびっくりし、それほど、餌が豊富にあるのだと感じました。私は、海や港の事は詳しくありませんが、この『はしけ』の使用を事前資料で知った際、『はしけ』を使うほど、とても小さな港をイメージしていたのですが、想像以上に大きな港でした。



そして国後島に初めて上陸し、港に降りてから、持ち物検査を受けるため順番に並びました。

私の番になると、持ち物検査で検査員に止められ、奥の部屋へ行くよう言われました。奥の部屋には別の検査員が居て、小心者の私は、カバンの中のを全部出そうとすると、検査員が、そこまでしなくて良いというジェスチャーで、カバンの中からクリアファイルの紙資料を取り出し、パラパラと1枚1枚めくり始めました。それ以外の持ち物は確認せずに通してくれました。紙資料に興味があったのかなあと、とても不思議な気持ちになりました。後で過去にも訪問されたことがある団員の方に聞くと、昔はそんなに検査も厳しくなかったが、数年前から、時折、持ち物検査で資料の内容を確認し、北方領土が日本の領土だというような内容の記載があると、注意されたということです。私の資料もそのような目で見られていたのでしょうか。心の中は何か腑に落ちないような気持ちでした。



持ち物検査を終えるとトラックバスに乗り、友好の家に到着するまでの間、車窓から綺麗でカラフルな可愛い公園をあちらこちらで目にしました。そして、友好の家に近づくにつれて、舗装された立派で綺麗な道路へと変わっていきました。道路も公園も、ここ数年で整備されたものだとわかりました。



国後島代表面会では、アンドレーエヴァ地区代行から「南クリル地区の住民が2018年以降、出生率が死亡率を上回っている」というお話をお聞きしました。また、2018年に開園された「ソルヌイシコ」こども園の視察では、保育料が、第2子15%割引、第3子無料と優遇された料金制度、そして、施設内において、子供用プールはシャワールームが併設され、看護師が常時、待機し、水温管理がされており、体育館や音楽ルームなど、日本の公立の保育園より充実した施設だと感じる程、立派な建物でした。今の南クリル地区は、子育て世代の両親や子供達にとって魅力ある充実した環境づくりに注力していることが理解されました。



ホームビジットでは、当初予定されていた訪問先のご家族が旅行に行かれていて、台風で戻って来れないため、急遽、訪問先が変更され、文化会館の館長宅であるターシャさんの家庭に訪問させていただきました。友好の家からターシャさんの車で、舗装されていない道路を数分走ると、ここが家だと案内してくれました。ターシャ邸は、門のある立派な2階建ての家、そして庭にはサウナ付きバーベキューハウス、温室野菜ハウス、更にもう一つバーベキューハウスがあり、おそらくこのような裕福なご家庭は北方領土内で数件くらいだろうと思いました。話を聞いてみると、ターシャさんの旦那様が漁業関係の自営業をされており、このようなすばらしい環境に住めるのだとお聞きしました。旦那様にもお会いしたかったのですが、仕事でお留守でした。2時間半の訪問の間、家の中を含む敷地内を案内していただき、リビングでターシャさんとお母様、妹、ターシャさんの息子の4名と私たち訪問団

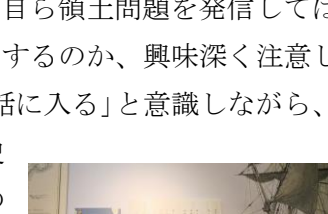
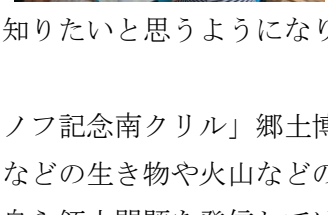




3名で、用意していただいたブリヌィやフルーツをご馳走になりながらお話をしましたが、領土問題のことには何も触れず、当たり障りのない会話を携帯の通訳ソフトを使い、あっという間に時間が過ぎてしまいました。ターシャさんの妹も、ターシャさんの家の隣に一軒家で住んでおり、夫が自営業だと教えてくれました。ターシャさんのご両親は、今は年金生活で国後島の西側の泊で住んでいることを教えてくれました。泊地域は、年金生活の方には南国のような気候で住みやすいようです。ターシャさんの夫は、年に数回、仕事で北海道に行く機会があり、北海道の回転寿司が好きだとおっしゃっていました。ターシャさんの息子は、今年の日本の訪問ビジットで兵庫県に参加する予定だそうです。日本の事を良く知っていて、日本人慣れしている家族だと思いました。ターシャさんにお会いするまで、国後島に住んでいる住民は、ロシア側の思惑で住まわされていると想像していましたが、ターシャさんのようなご家族もいらっしゃることを知りました。私がターシャさんのような暮らしぶりをしているホームビジット側の立場なら、領土問題の会話に触れたくないだろうと思いました。何らかの影響で、今の生活環境に変化が生じることは望まないだろうと思います。当初のホームビジット先は、教師をされているご家庭でしたが、次回、又参加できる機会があるなら、北方領土内の公務員一家や、一般家庭の方々ともお話をしてみたいです。

今回の訪問で初めて知ったことですが、日本人が訪問する際の住民交流会の場において、毎回、日本の地域文化などの紹介を担当する都道府県があるらしく、今回は富山県が担当県でした。私も、万華鏡づくりのスタッフとして協力させていただきました。万華鏡づくりには、当初、ロシア人が60名参加する予定だったのですが、当日は50名くらいになりました。物づくりや好きな硝子を選ぶ子供たちの姿は、楽しそうな振る舞いで大変喜んでくれましたが、もっと集まってくれたら良かったのにと感じました。この住民交流会を通して、「現地の人々がどのような参加の呼びかけをして下さっているのか」また、「どれくらいの人々が、日本人が来ていることを知っているのか」をもっと知りたいと思うようになりました。

視察や見学の中で、特に私が心を打たれたのが「F. I. プジヤーノフ記念南クリル」郷土博物館を見学した時です。そこでは、北方領土に関する動物や鳥、魚などの生き物や火山などの説明の後、歴史の展示がありました。訪問前の事前研修会において、自ら領土問題を発信してはいけないという意識があったので、ロシア人はどのように歴史を説明するのか、興味深く注意して聞いていました。アイヌ民族の話に差し掛かり、「そろそろ日本人の話に入る」と意識しながら、耳を傾けていましたが、「1945年まで日本人が住んでいました」と歴史の説明がその一言で終わりました。私は、心の中で、「えっ。日本人の説明はたった一言のそれだけなの」と、とても悲しい気持ちになり、ショックをうけました。そして、その説明の他には、「日本とロシアがビザなし交流をして28年目。今までの交流を通して、日本側からも





らったものは、この博物館で保存している」と聞き、とても素敵な花嫁衣装が展示されているのが目に留まりました。元島民の息子が、母の花嫁衣装を博物館に寄付したという説明を聞き、「どんな思いで、こんな立派な花嫁衣装を寄付したのか」その息子さんやお母さんの気持ちを考えると、やるせない気持ちになりました。私は、ロシア側の説明に、何を望んでいたのでしょうか。日本の領土だと認めて説明してほしいと思う期待があったからなのでしょう。ただ、確信したのは、やはりシベリアな領土問題に関わる歴史であるため、日本人に説明する時には触れてはいけない内容なのだと感じました。その歴史の説明は、責任重大であるからこそ前館長が担当したのだと思いました。説明する相手が日本人でない外国人なら、どのような説明をするのだろうか。ロシアにとって有利な説明になるのだろうか、とても気になりました。



国後島滞在時の宿泊や1日3食の食事はすべて、『日本人とロシア人の友好の家』で、大変お世話になりました。その友好の家で、大野団長や北方領土に関わる国会議員の方々、同じ北対協の推進委員であり元島民二世の濱松副団長はじめ、大勢の団員の方々とも、夕食後から日本時間で21時の消灯まで、毎晩、いろいろなお話をさせていただきました。過去の訪問話やそれぞれの立場での考え方を直接お聞きしたり、私も、その日その日感じた感情を聞いてもらったり、北方領土に関して経験や知識の少ない私にとって、とても貴重な経験となりました。その中で、大野団長から「昔の友好の家では、この食堂内にテレビがあり、NHKをみる事ができた。そして、現地のロシア人と北方領土問題に関して話し、ロシア側が日本の領土だと認める発言もあった」という過去の話をしてくれました。やはり、過去の話と現状を比べると年月が経つにつれて、日本と北方領土の関係性に希薄化が進んでいる感じがしました。



今回、国後島に3日間滞在する中で感じたことは、大きくわけて3つあります。1つめは、ロシア側の日本に対する対応です。1日目の代表面会でのアンドレーエヴァ地区代行の挨拶の中で、「ビザなし交流が出来るのも日本の外務省に感謝している」という言葉しか聞けず、領土問題に関わる言葉が一言もなく、まるで姉妹国のような友好的で淡々とした挨拶に感じました。そして、ホームビジットにおいても領土問題に関しての話し合いができず、博物館においても日本人の写真がたくさん展示されているのに一言で説明が終わるといった雰囲気から、全体的にロシア側の日本人に対しての反応がとても薄いのか、それともあえて薄くしようとしているのか、返還を意識している日本人にとっては、とても悲しい事実だと実感しました。

2つめは、衛生面についてです。町の至るところで野良猫や野良犬を見かけ、バス停では、バスを待つロシア人の隣に、野良犬が当たり前のようにいました。また、夜中に数匹の遠吠えも耳にし、怖かったです。国後島から「はしけ」で出港する時も、エンジンの回転で海の流れが変わり、海の中から魚の加工廃棄物などが確認でき、腐敗した強烈な臭いがしました。そのようなことから、まだこの国後島の衛生面に対する取り組みの遅れが気になりました。

そして、3つ目は、インフラ整備と経済格差です。公園の多さ、こども園やスポーツ健康施設などの設備が整っている中、行政府に通じるメイン道路を一本外れると、舗装されていない道路がほとんどです。



たくさん建てられている公共マンションの外観は、一見カラフルで綺麗で新しいように見えますが、よくよくドアや窓などを見ると、かなり老朽化しているのがわかりました。そのような状況から、国後島の住民の中には、ホームビジット先のような裕福な家に住む方もおられる一方、公共マンションの多さから、ほとんどの住民が公共住宅マンションに住んでいるという事実に、貧富の差を感じました。そして、滞在中は雨天での移動が多かったため、トラックバスの狭い車窓からしか周辺を見る事ができませんでしたが、見渡す限り飲食店や繁華街もなく、現地の人は、夜をどのように過ごしているのか不思議でした。みんな家で集まりウォッカを飲んで楽しんでいるのでしょうか。共働きの夫婦が多いと聞きましたが、優遇されているのは保育園のみで、外食等、それ以外の便利さが見当たりませんでした。南クリル地域は、建設されている建物は完璧ですが、まだまだ足りない不便さを感じ、とてもアンバランスな場所という印象を受けました。しかし、これから先、すごい勢いでロシア人にとって住みやすい環境に整備され、充実していくのだろうと感じました。日本人に頼らなくても、この地域はどんどんロシア化していくというロシア側の意識に見えました。



国後島を後にした私たちは船で4時間30分かけて色丹島に向かいましたが、当初予定していた出発が台風の影響で翌日に延期となったため、色丹島に上陸してからの滞在時間は2時間という短いものでした。港には、近年建設されたであろうと思われる規模の大きな水産加工工場がありました。2年前より更に大きくなっていると聞きし、建設のスピードの速さに驚きました。色丹島内の移動は、現地の方が用意していただいた自動車に乗車させていただき、斜古丹日本人墓地への移動途中、道路は全く舗装されておらず、通常は前方の車が見えないほどの土ぼこりに覆われるそうですが、訪問時は数日雨が続いていたので、土ぼこりはありませんでした。車と並行して真横を牛が放牧されていたり、焼却炉等の設備が整っていないためか、一部のエリアに集まったゴミが山のようになり、火がついていないのに煙が立っていて、いかにも悪臭が漂う不衛生な環境が伺えました。



めか、一部のエリアに集まったゴミが山のようになり、火がついていないのに煙が立っていて、いかにも悪臭が漂う不衛生な環境が伺えました。



国後島の古釜布墓地の墓参は、雨の影響でトラックバスの車窓から墓地を見学するだけになってしまいましたが、色丹島の斜古丹日本人墓地はお墓参りさせていただくことができ、線香をお供えさせていただきました。

また、国後島の古釜布墓地の周囲の環境は建物などもなく、殺風景な

場所にあるように感じたのですが、色丹島の斜古丹日本人墓地は、学校施設などがあり繁華街のような所に車を止め、路地を数分歩くと右側に日本人墓地があり、左側にロシア人の墓地が隣接していました。



この環境は、ロシア人の子供達が、先祖の墓参に来た時、隣の日本人墓地をどのように感じるのか興味を持ちました。また、これから先の未来、ロシア人の墓地が増えることが予測されます。そうすると、更に複雑な領土問題になるだろうと感じました。

色丹島での滞在時間が短いため、当初予定されていた水産加工工場建設現場の視察や、現地の人達とのレストランでの夕食交流会が無くなり、とても残念な気持ちでしたが、この気持ちを察してくれたのでしょうか。車に乗せてくれた方が、携帯で晴天時の色丹島の写真を数枚見せてくれました。写真では、海や段壁などの景色がとても綺麗で、自慢の場所なのだと思います。確かに、船から見た色丹島も、青い海と緑の山に囲まれ、その中に、茶色く錆びた船がポツンポツンと放置されていて、ある意味『絵』にはなると感じたくらいです。私にとっての色丹島は、衛生面などは別として、観光で訪れたいと思いました。



私の人生の中でとても貴重な経験になった現地での訪問。北方領土は、他国の季節労働者が雇われたり、観光客が訪れています。また、他国の企業が北方領土の土地を購入していると耳にしました。他国で可能な事が、日本人には不可能だということを知りました。北方領土にロシア人が来て、73年という月日が流れています。この月日は、現状を知れば知るほど返還の可能性は、余計に難しい状況であると分かります。

語り部として参加された元島民二世の本田さんの「北方領土の四島返還は絶対譲れない。ここで諦めたら、日本人は、粘れば諦めると思われ、他の領土問題で敵対している他国にもなめられてしまう」という言葉。事前研修後に宿泊した旅館先のおかみさんの「もう返還は諦めている。飛行機での墓参だけ続けてくれればそれで良い」と、未来に期待を持たないと感じとれる言葉。タクシーの運転手の「返すなら返す、返さないなら返さないとどっちかにしてほしい。そうすることで、日本人も北方領土に行きやすく、観光客が増える」という言葉。人それぞれの考え方が、とても心に響いてきます。

私は、現地で見えたこと、感じたこと、聞いたことを、発信しようと思いましたが、想像以上の船酔いで、「えとぴりか」のWi-Fiで発信することができず、根室空港に到着するまでに、何とか今回の訪問の報告をフェイスブックに掲載したところ100以上の「いいね」の反響をいただきました。

そして、自宅に戻ってから4日後に、FMたなべの放送で今回の現地視察について1時間弱、報告をさせていただきました。また、青年会議所のOBという立場から、9月に和歌山県内の青年会議所メンバーが集まる会議の場で、今回の現地視察について報告をする予定にしています。

現状を報告するだけでは、返還の可能性が低いと感じてしまうだけの発信になってしまいます。私自身、日本人として日本固有の領土だという誇りを持ち、元島民の奪われた悔しい気持ちは忘

れないでほしいという願いを発信し続けていきます。そして、四島返還の想いを心の底に持ちつつ、これからの日本として出来る事は、現在、安倍首相が発信している共同経済活動しかないと感じました。北方領土を訪問し、衛生面や環境設備などさまざまな状況を見て、日本の力を本来なら必要としているように感じました。北方領土に一番近い日本の企業が参入できれば、北方領土が更に住みやすく、日本人としても行きやすい環境になり、両国にとってもメリットになると考えることができると思います、そのような私の考えも発信していきたいと考えます。

訪問中、たくさんの方に大変お世話になり、有難うございました。